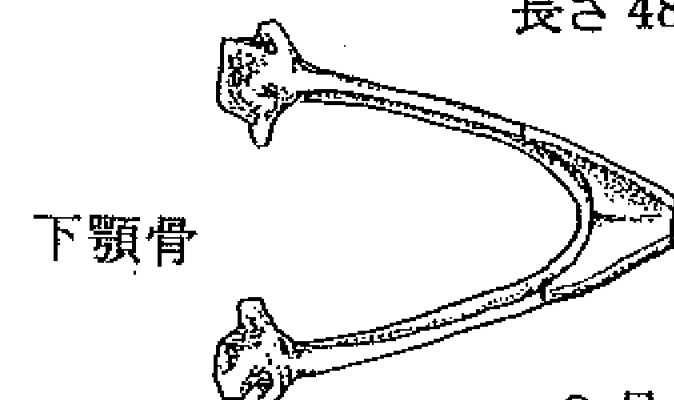
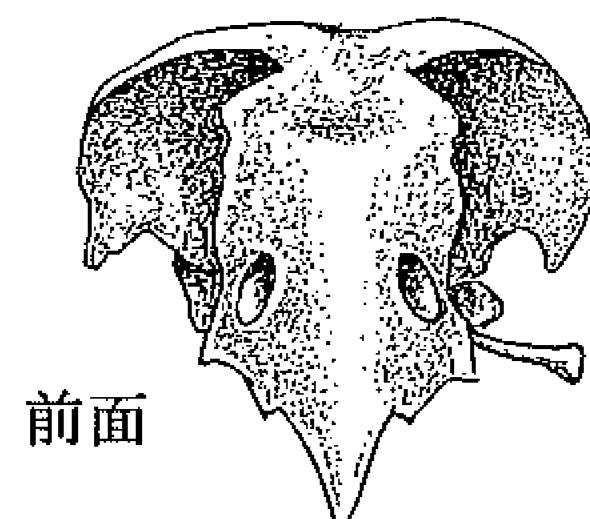
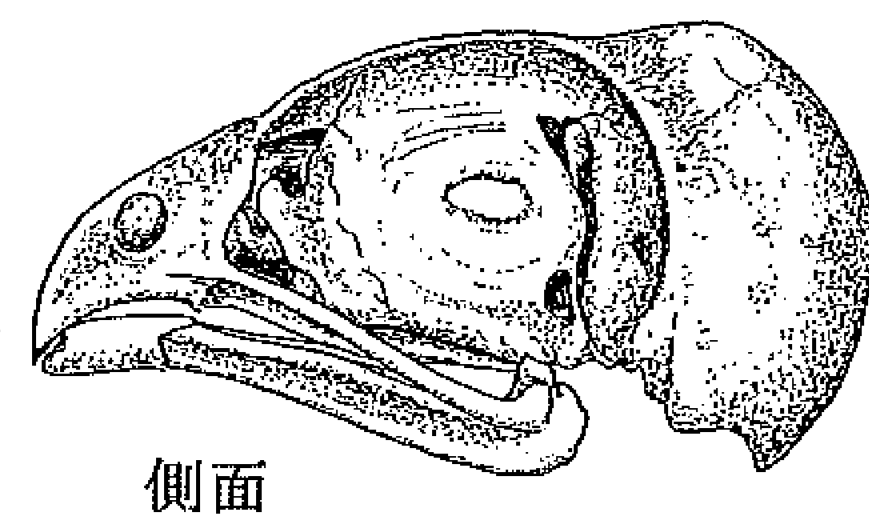




猛禽類の頭骨標本作成 ～チョウゲンボウ～

9月末の夕方、加古川西岸河川敷の新幹線鉄橋の下でチョウゲンボウの死骸を見つけた。きれいな風切り羽をいただこうかと思ったが、病原菌に汚染されている恐れがあるので止めた。しかし猛禽類の頭骨が欲しかったので、近くのススキの草むらにそっと隠して白骨化するのを待つことにした。カラスやネコなどの食害を避けるために、近くに都合よく落ちていたナイロンのネットに死骸を入れておく。

2週間後、死骸の入ったネットを灌木の繁みの奥に移動させた。この時期、河川敷では定期的に草刈りが行われるので、草むらの死骸が草刈り機で粉砕される危険があったためである。それでも安心できない私は、さらに一か月後、死骸の入ったナイロンネットを、持参した植木鉢の土の中に埋葬して持ち帰った。

自宅の庭の隅に家人に内緒で植木鉢を置き、骨になるのを5月まで待つつもりであったが、待てない私は2月半ばにネットを土の中から引き揚げた。骨は酸性の土の作用か、かなり腐食しているようだった。「あかん、このままでは骨が溶けてしまう。とりあえず頭骨だけは確保しよう」と、頭骨と下顎骨を取り出し、水洗いしてから1日干して乾かした。

チョウゲンボウはハトぐらいのタカの仲間で、魚住小学校ではここ3年間続けて校舎の換気口で営巣し、ヒナが巣立っている。二見西小学校ではセミを食べるのをよく目撃した。東中でも10月末に校舎の上空を飛ぶのが見られた。課題研究で魚住小のチョウゲンボウを調査している県立農業高校3年生のKさんによれば、「ヒナを育てるための餌はネズミが9割であると判明した」という。明石の西部にはそのような環境が保たれているようだ。

鳥は空を飛ぶために体を軽くすることに徹している。そのため骨も中空にして歯も捨てた。脳を守る頭骨もごく薄い。以前アオサギの全身骨格を見つけて組み立てたが、骨の軽さに驚いた。チョウゲンボウは猛禽であるが、やはり骨は華奢で、頭骨の厚みは卵の殻より薄い。嘴や下顎骨も細く薄く、これで肉を引き裂いたりできるのかと思う。激しく木をつつくキツツキは頭骨や嘴がよく折れないものだ。

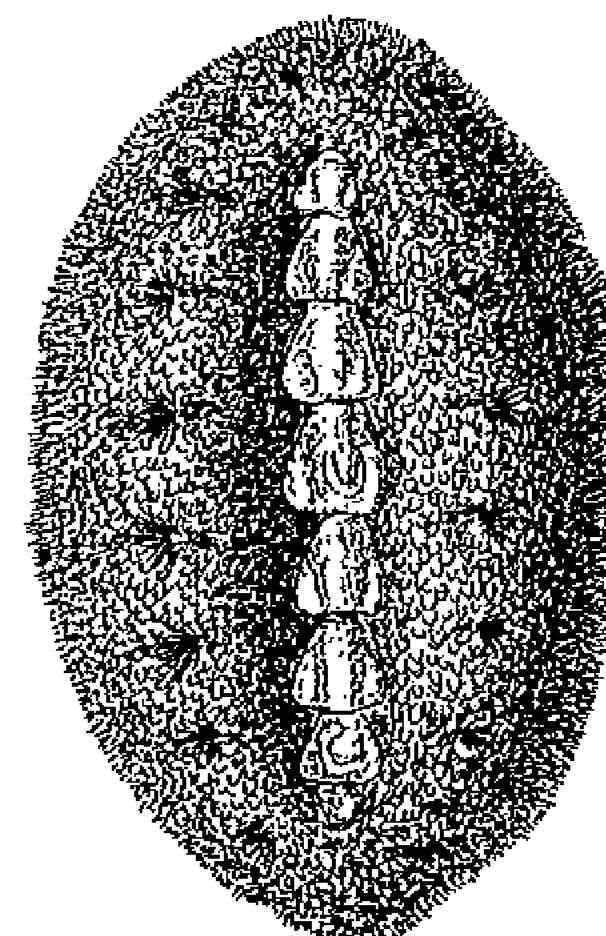
今回、鳥の頭骨について「鳥の骨探」という図鑑で調べた所、上の嘴は頭骨に固着しているのではなく、ゆるくつながっていて、嘴を完全に閉じる際には上の嘴が引き下げられて、下の嘴にぴったり重なるようになっているという。私たちヒトはもちろん、哺乳類にはこんな機構はない。チョウゲンボウの全身骨格の作成はできなかったが、新しいことを知ることができたのは収穫であった。



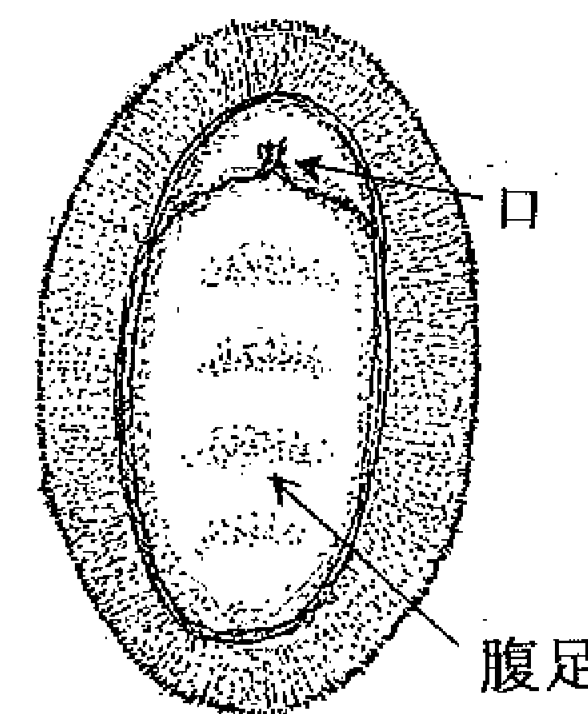
二見西小のチョウゲンボウ
(播磨探検268号より)

「二枚貝でも巻貝でもない ヒザラガイ」

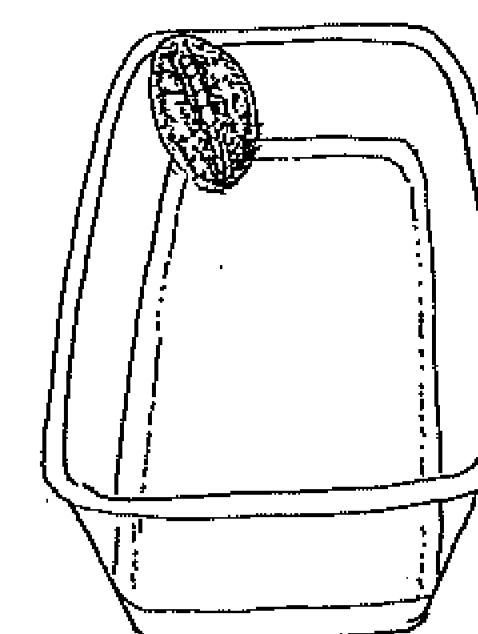
殻片が8枚



腹側の様子



横から見ると



這い上がるケハダくん

ケハダヒザラガイ (ケハダヒザラガイ科) 毛肌膝皿貝
学名 *Acanthochitona defilippii* 体長 66mm 幅 45 mm

立春を挟んで寒い日が続いている。こんな時期に活動するのは野鳥ぐらいである。他には海岸の偶然の漂着物に期待するしかない。というわけで姫路市東部の大塩の浜を訪れた。昨日まで季節風が強かったので、スナメリの死体でもストランディングしていないかなと期待したが、潮が退いた朝の干潟には何も見つからなかった。東の端まで歩き、天川河口の手前で折り返そうとして、波打ち際にヒザラガイが転がっているのを見つけた。これは普段潮間帯の岩にびったり張り付いている。なぜ剥がれてこのように転がっているのだろうか。ポーっと生きていたのか、しゃっくりをした拍子か、剥がれた理由は謎だ。

持ち帰って調べたところ、ケハダヒザラガイという名前が分かった。かなり普通種のように付近の岩場や突堤の石にもたくさん張り付いている。扁平な円錐状のマツカサガイなども同じ場所に見られ、そういう貝の仲間だと思っていたが、これは二枚貝でもなく巻貝にも属さない独立した種であるらしい。ちなみにマツカサガイやアワビは巻いてないように見えるが巻貝である。また同じように岩に張り付いているカキは二枚貝である。

ヒザラガイは背中に8枚の殻片という貝殻のようなものが並んでつながっているのが特徴である。これはまるで武者の鎧のようである。外敵から体を守るためのものだと思うが、その割には体を半分ぐらいしか被っていない。ケハダヒザラガイは特にこの殻片が小さいので、防御に役立つとは思えない。

ヒザラガイを透明な容器に塩水と共に入れておくと、体の緊張を解いて容器の底に張り付いた。私は容器を持ち上げて張り付いているヒザラガイの腹部を裏から詳細に観察した。透明容器を使ったのは「さすが俺」である。腹部はマツカサガイやアワビなどの貝と同じく腹の筋肉(腹足)を波打たせて移動するようだ。また先端部には口がある。おそらく岩の表面の藻類などを食べるのだろう。

2時間ほどすると、こいつは容器の壁に張り付いて登り始めた。海岸でも海水面のすぐ上によく見られるように、水中と水上の境目辺りで中途半端に生きるのが好きなようだ。ヒザラとは膝皿のことで、膝のお皿の骨(膝蓋骨)に似ていることからついたらしい。